

日本の持続性の智恵シンポジウムin奈良

事務局

7月最後の日曜日（29日）、奈良公園の中にある奈良県文化会館で、上記シンポジウムを開催した。当日はまず関西グループ世話役の許斐さん率いる「エコパートナー21」の子どもたちによる環境ミュージカルが上演され、子どもたちの地球を守ろうという熱い思いに拍手が沸いた。引き続き、シンポジウムの開会にあたり、加藤三郎共同代表より、本プロジェクトとシンポジウムの趣旨説明、藤村コノエ共同代表より昨年まとめた「日本の持続性の智恵」8項目の説明があった。次いで、内藤正明氏（京都大学名誉教授）、西田正憲氏（奈良県立大学教授）、木原勝彬氏（ローカル・ガバナンス研究所所長）に、加藤共同代表も加わり、藤村共同代表のコーディネートのもとパネルディスカッションが行われた。概要は以下のとおりである。



話題1. 8つの提案についての意見、感想

内藤：京都大学定年退職後、今2度目の勤めを仏教大学でやっている。同時に滋賀県の研究機関長や6つのNPOの代表もしている。すべて持続可能な社会を作るためにどうしたらよいかという側面からのものである。8つの提案については、大事なこと8つを上からうまく選んでいると思う。

西田：私の専門は景観論で、特に日本人の風景観がどう変わってきたかを研究している。今回のテーマをもらったとき、失われた伝統的智恵は風景観の問題と極めて酷似していると気づいた。我々は現在の自然風景を、明治以降近代に入ってきた西洋の近代的な風景観、西洋の自然美の理論を基に風景を愛でており、それまであった伝統的な風景の見方があるときから急に忘れ去られた。その結果、大自然の風景は国立公園としてオーソライズされ、1960年代の高度経済成長期にレジャーブーム、モータリゼーションの到来で、奥地の自然

も消費され食べ物になっていった。しかし、最近では里地、里山や水辺の風景など人間と関わってきた、持続する風景への見直しが起きている。

8点については、強いて風景の観点から言えば、かつて日本人は身近な風景、海辺の風景を大切にしていたことを見直していければという気がする。
木原：NPO歴28年で、最大の関心は地方自治のあり方、市民の政府をどう作るかだ。奈良のまちづくり活動を通じて学んだことは集住秩序だ。多くの人々が肩を寄せ合って生活する都市にはビジネスも楽しみもある。それ故の一つの秩序、集住の約束事・慣習が宿されていて、家の建て方もお互いの環境を壊さない形で建てられている。8つの提案については、地方・地域の視点でどう具現化できるかということが重要だと思う。

この他、会場からは、時代制約をした上でこういうことが主として言えたという言い方をしないと誤解を招く、過去はよかったという精神論にならないように、というご指摘を頂いた。



話題2. なぜ軽んぜられ見失われいったか

まず事務局から、試案として、①第二次大戦後、戦前の日本的なものが全て否定された、②経済価値が全てに優先されるようになった、③地域共同体・会社共同体意識が崩壊し、社会全体としてのモラルや規範が維持できなくなった、④国や政府の弱体化で、国としてのビジョンも価値観も見えなくなってきた、⑤「科学」イデオロギー闘争の中で、日本の智慧の出番はなかった、を提示した後、全員で議論した。

西田：西洋文明は極めて合理的。だからグローバルになっていく。風景観もそうで、特に近代の景観評価は科学が背景にあり、科学的評価が審美的評価を誘導しているのが近代の風景の構造だ。今、里地里山など20世紀に失った風景に目が向いているが、それらを照らし出している言葉は科学で、文化的景観という新たな概念が生み出され、科学的評価が審美的評価を誘導している。これと同様、伝統的の智慧を今蘇らせるには、現代の科学的合理精神で納得できる新たな価値付けが必要ではないか。

木原：ずばり明治近代化以降の地域の亀裂だと思う。地域には豊かで多様な文化や智慧のある生活スタイル、価値観があった。ところが、急速な近代化と中央集権国家体制は、こうした地方を切り捨て結果的に日本の智慧を喪失させ弱めてしまった。地方の文化は自然風土であり第1次産業がベース。それを第3次に行くのが望ましいという発想が、明治あるいは戦前まで持っていた価値を潰したのではないか。

内藤：システム工学派として、こういう智慧はどんな時持つかといえば、閉鎖系社会の時。開かれた社会の時は、どこにでもフロンティアがあり飛び出せばいいわけで「足るを知る」必要はない。しかし、江戸のようにどこにも行けないならその中で和を貴び足るを知るしかなかった。ところが、西洋列強が植民地主義で押し寄せ、それなら日本も、ということになった。あの時にいっぺんに崩れた。もう一つはグローバル化だ。グローバリズムの波の中で、物理的には無理にしても経済の力で世界に広がろうとなったら、こんな智慧は放置される。今改めて何故必要かという、地球全体が閉鎖系だからだ。例えば、不生不滅、不増不減、不浄不垢と般若心経に書いてあるが、お釈迦さんはすごい物理学者だったのではないかと思う。般若心経は自然の摂理の根本を言っているのではないかと思う。

加藤：科学の言葉でないとなかなか受け入れてもらえないというのは全くその通りだろう。「足るを知る」「共生」というのを科学の言葉で説明できるのかというと、なかなか難しいかも知れないが、そこは工夫が必要なのかと思う。

この他会場からは、8つの内容は内向きで外への活力が見出せない、ドイツのような思い切った政策が必要、自由と権利をはき違えたため守るべきものが失われていったのではないか、などの意見が出された。

話題3. 活かしていくには

内藤：滋賀県では「もったいない社会」というのはどういうものか、具体的に描いている。「もったいない社会」が後ろ向きの社会ではなく、知事は「懐かしき未来」という言葉を使っている。昔の智慧を活かしながら新しい未来を切り拓くにはどうしたらいいのか、それには智慧が要る。それを絶対滋賀県発で出していこう、というのが今の私たちの思いだ。そのためには、誰にも分かるように描くことが大切。大小分離の智慧を分かるように見せていきたい。

会場：家庭での環境教育が必要だ。昔は、もったいないとか、家の中でいろいろなものを整理したり、広告の裏は使うとか、そういったものを家庭の中で自然と見聞きした。おばあちゃんも僕たちに話してくれた。そういうことが今もう家庭の中でされなくなったのではないか。滋賀県では、以前から琵琶湖を中心に環境を大事にしなくては行けないという教育があった。やはり教育だと思う。

会場：銀行員として20年勤めていて、職場が「理・利」の世界になって「情」の世界がなくなっている。その理由は、アメリカの狩猟民族の考え方が入ってきて、農耕民族の考え方が薄れてきたからではないか。狩猟民族の考え方は1年で結果を出すという考え方、農耕民族は蓄積して長年の

循環社会を考えるということでは全然ちがう。農耕民族の長年蓄積して良い社会を築くということを考えていかないと、日本もぎくしゃくして行くのではないか。それから広めるにはキーワードが必要。簡単なキーワードを決めて何回も何回も発信していけば日本中世界中に広まっていくかなと思う。

西田：20世紀の科学では抜け落ちていたところを救う新たな概念が必要。例えば、文化的景観という概念が出てくると、今までわけのわからない神秘的な場所や土地の霊などまでも一つの文化だということでは光を当てていける。新たな光を当てるために新たな概念を打ち立てる必要がある。

内藤：滋賀で世界に冠たるエコ村を作ってみせようとしたが、殆んど頓挫した。何故かという、全部現行法律にひっかかる。夢の無い話だが、ヒントはそういうところにある。



最後に加藤共同代表から、本日の意見を加えつつ「日本の持続性の智慧」を充実させていく旨、また藤村共同代表からは、精神の自由を楽しむことと、夏休みに子どもたちと人力のみのエネルギーを使った遊びを一緒にやって欲しい旨の発言があり、閉会した。